Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-05

自己愛的自己評価プロセスに関する一考察

原田, 新

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,2(1):13-22

(Issue Date)
2008-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81000804

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000804

神戸大学大学院人間発達環境学研究科
研究紀要第２巻第１号　2008

研究論文

自己愛的自己評価プロセスに関する一考察

A discussion of narcissistic self-evaluation process

原　田　　新*
Shin HARADA *

要約：本研究の目的は，近年海外においてなされている自己愛を自己評価プロセスの観点から捉えた研究やそのモデルについて概観することと，そのモデルの問題点について考察することであった。まず初めに，特に精力的にこの観点から研究を行っているRhodewaltらの「自己愛の社会・認知的自己調整モデル」，Baumeisterらの「自己本位性脅威モデル」，それらに関連する実証的研究についてのレビューを行った。続けて，これら両モデルの問題点として，自己愛的な機能の側面が重視され，その機能を生み出す自己愛人格の本質的な側面は重視されていない点，様々な自己評価プロセス方略の中で自我脅威状況において生起するものと，それに関係なく日常から行われているものとが厳密に区別されていない点，他者の過小評価や共感性の欠如による対人関係など，既存の研究で提示されるもの以外の方略も存在する可能性がある点，自己愛の過敏性について全く考慮がなされていない点の４点について考察した。最後に，自己愛人格の根本に存在すると考えられる自己概念の脆弱性や自己愛者の防衛的自尊心の測定方法について考えていく必要があることと，以上の４点の問題点を考慮して，さらに包括的なモデルを構築していくことが今後の課題として挙げられた。

１．はじめに

Freud（1914）が精神分析理論に「ナルシシズム（自己愛）」の概念を取り入れて以降，自己愛概念は精神分析において重要な概念として取り扱われ，特に自我心理学の文脈において発展していった。そして1970年代から80年代にかけて，Kernberg（1970，1975，1982，1984など）とKohut（1971，1977など）が自己愛人格障害に関する研究を進めて以降，さらに活発な研究が行われるようになった。一方，Raskin & Hall（1979）がNarcissistic Personality Inventory（自己愛人格目録，以下NPI）を開発して以降，自己愛に関する実証的研究も国内外で盛んに行われてきた。また，近年，臨床理論において自己愛の過敏的側面の存在が注目され（Broucek，1991；Gabbard，1994；岡野，1998），実証的研究において過敏的側面をも測定しうる自己愛尺度が作成されている（相澤，2002；中山・中谷，2006；高橋，1998；谷，2004a）。現在まで，これら様々な自己愛尺度を用いた実証的研究により，自己愛人格に関する数多くの知見が蓄積されてきた。

そして近年，特に海外では，自己愛を自己評価のプロセスから捉え，その考え方に基づく実証的研究が多数行われている。その中でも，特に精力的に研究を行っているのがRhodewaltら（Morf & Rhodewalt，1993；Rhodewalt，2001；Rhodewalt & Eddings，2002；Rhodewalt，Madrian，& Cheney，1998；Rhodewalt & Morf，1995，1998； Rhodewalt，Tragakis，& Finnerty，2006など）とBaumeisterら（Baumeister，Bushman，& Campbell，2000；Baumeister，Heatherton，& Tice，1993；Bushman & Baumeister，1998など）であり，両者はそれぞれ，「自己愛の社会・認知的自己調整モデル」（Social/cognitive self-regulatory model of narcissism，Rhodewalt，2001）と「自己本位性脅威モデル」（The threatened egotism model，Baumeister & Boden，1998；Baumeister，Smart，& Boden，1996）という自己愛的な自己評価プロセスに関するモデルを提唱している。このような考え方は，近年の自己愛研究における一つの大きな流れとして存在するが，日本においては中山（2008）の展望論文において議論されている他に，これらのモデルに関する考察はほぼなされていないように思われる。ところで，この２つの考え方は，自己愛の過敏的側面は重視されておらず，その実証的研究においても，自己愛の誇大性を中心的に測定するNPIが自己愛を測定する尺度として用いられている。一方，日本においては近年過敏性に関する議論が盛んになされ，実証的研究で過敏性にも着目したものが多い（相澤，2002；上地・宮下，2002，2005；中山，2005，2007；中山・中谷，2006；岡田，1999；小塩，2002；清水・海塚，2002；清水・川邊・海塚，2006；谷，2004a，2004b，2005，2006a，2006bなど）。すなわち，自己愛研究の日本における流れと世界的な流れとは異なっているといえる

*神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程

（2008年４月１日　受付
2008年９月１日　受理）

が，このような世界的な自己愛研究の流れを把握することは，今後，日本の自己愛研究を発展させていく上で重要なことであると思われる。特に，これらのモデルの考え方と，日本において過敏性に関する実証的研究から得られた知見とを合わせて考えていくことは，今後より包括的に自己愛概念や自己愛的なプロセスを理解していく上で，意義深いことであると考えられる。そこで，まず本稿では，Rhodewalt らと Baumeister らのモデルを中心に，それに関連する実証的研究についても概観することを目的とする。そして，これらの両モデルの問題点について考察した上で，今後の課題についても述べることとする。なお，両モデルに関連する研究のレビューは中山（2008）において詳しくなされているが，本稿の後半で，筆者の考える両モデルの問題点をより明確にする為に，本稿においても詳細にレビューすることとする。

２．自己愛の社会・認知的自己調整モデル

Westen（1990）の「自己への認知的－情動的没頭」という自己愛の定義を用い，Rhodewalt（2001）は，“広範囲な自己への認知的－情動的没頭を，現代の社会的・認知的・人格的観点の中で，どのように位置づけられるだろうか。”（p.181）など複数の自己愛に関する疑問を挙げ，これらに取り組む為に，自己愛の社会・認知的自己調整モデル（Figure 1）を提唱した。このモデルにおいて，自己は「自己知識（self-knowledge）」「自己評価（self-evaluation）」「自己調整（self-regulation）」という三つの要素を有している。Rhodewalt（2001）によると，「自己知識」とは，認知的な自己（Linville & Carlston，1994）であり，評価，自己に帰属される特性や能力，可能自己，理想や目標を表す自伝的情報を心的に保存する部分である。また「自己評価」とは，自己価値感の高さや安定性に関するものである。さらに「自己調整」とは，肯定的な自己の見方の防衛や高揚の為に用いられる，個人内方略と対人的方略の両方に関するものである。これらの三要素は，分離した別個の存在ではなく，相互に影響しあっている。そして自己愛者が積極的に社会的環境を操作することで，さらに自己知識や自己評価に影響が及ぼされる（Rhodewalt，2001）。

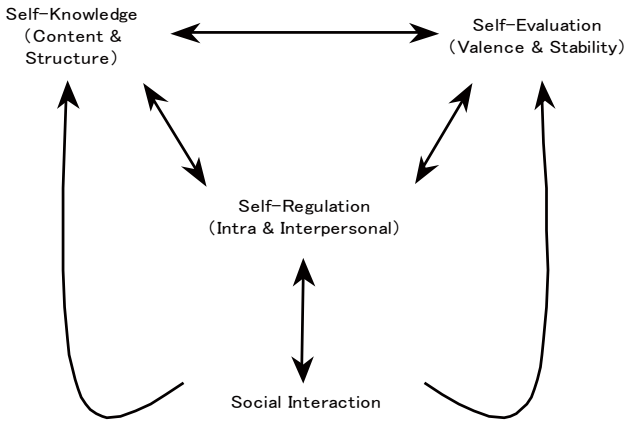

Figure 1. 自己愛の社会・認知的自己調整モデル（Rhodewalt，2001）

以下に，この三要素に関する実証的研究について概観する。

(1)「自己知識」に関する研究

まず，多くの臨床家（例えば，Bach，1977）が，自己愛的な自己概念は脆弱で，内的一貫性に欠けており，組織化が貧困で，不安定であるということに注目していることから，Rhodewalt ら（Rhodewalt et al.，1998；Rhodewalt & Morf，1995，1998；Tchanz & Rhodewalt，2001）は，欠損モデルと構造モデルという二つの観点から，「自己知識」の問題にアプローチしている。

欠損モデルによると，自己愛者の肯定的な自己概念は，貧困に形成され，不安定で，他者と同様自動的に接近出来るわけではなく，それゆえ自己愛者は，自己価値に関する社会的フィードバックや文脈上のフィードバックに，より依存的で敏感になる（Rhodewalt，2001）。このモデルに関し，Tchanz & Rhodewalt（2001）は特性記述子に関する me-not me 判断における反応時間を用いて，自己知識へのアクセシビリティについて検討している。その中で，自伝的情報（「あなたは，先月友好的に振舞いましたか？」）と社会的評判情報（「あなたの母親は，あなたを友好的であると思っていますか？」）とが用いられたが，いずれにおいても自己愛の効果は見られず，このような刺激が無い場合にも，自己愛者と低自己愛者との反応時間に差異は見られなかった。Rhodewalt & Morf（1995）は，自尊心を測定する Texas Social Behavior Inventory の各項目への反応に対し，その反応がどれほど確かであるかを調査対象者が示すことにより得られる自己確信（self-certainty）と NPI，自尊心と NPI との相関を検討したところ，共に正の相関を得た。この結果から，自己愛者は，自身に対して肯定的で，確信的な自己評価を抱いていることが示唆されているといえる。また，Rhodewalt & Morf（1995）は，調査対象者に 10 種の自己属性について理想的に望む得点を評定させ，各対象者の現実－理想の差異得点を算出した。そして，NPI と差異得点との関係を検討した結果，自己愛者は低自己愛者よりも，現実自己と理想自己との高い一致を示すことを見出した。現実自己と理想自己との自己一致はポジティブな適応との関連を示す（Rhodewalt，2001）とされるものである。すなわち，これらの結果は，自己愛の欠損モデルとは合致しないものであり，Rhodewalt（2001）自身も，自己愛的自己表象の欠損モデルを支持する根拠はほぼ見出されていないと述べている。

一方，構造モデルとは，自己愛者の自己知識の組織化において他者と異なっていることを特定するものである（Rhodewalt，2001）。この考え方においては，組織化の違いが情動反応性に結びつき（Linville，1985；Showers，1992a，1992b），その情動反応性が自己愛者の特性を決定付けるということが予測されている（Rhodewalt，2001）。Rhodewalt らは，その組織化の指標として，自己複雑性と評価的統合という二つの観点と自己愛との関連を検討している。自己複雑性とは，自己概念の複数の側面が識別される程度を表し，自己複雑性が高い人は安定した気分を示すとされている（Linville，1985）。すなわち，自己複雑性が低ければ，情動反応性が高くなることが予測され，自己愛者はそれに当たると考えられる。Rhodewalt & Morf（1995）は，その予測どおり，NPI と自己複雑性との負の関連を見出した。しかし，Rhodewalt & Morf（1998）や Rhodewalt et al.（1998）ではこの結果が得られておらず，自己愛と自己複雑性との関連についての結論は得られていない。一方，評価的統合とは，自己知識における肯定的評価と否定的

評価との統合性を表す概念であり，評価的統合が低い人（良い自己知識と悪い自己知識の分離度が高い人）は，自己に関する肯定的情報や否定的情報から，より情動的影響を受けやすいことが示されている（Showers，1992a，1992b）。そして，自己愛者の自己知識は，肯定的評価の次元と否定的評価の次元で分離している可能性がある（Rhodewalt，2001）ことから，NPI と評価的統合との負の関連が予測されたが，Rhodewalt et al.（1998）では，2 つのサンプルの両方で，これらに関連が無いことが示された。以上，自己愛的な自己知識として，欠損モデルでは自己知識へのアクセシビリティ，自己評価の確信度，現実自己と理想自己との一致，構造モデルでは自己複雑性と評価的統合に関する予測が立てられ，実証的に検討されているが，いずれにおいても自己愛者に特有であると予測された結果は得られておらず，自己愛者と低自己愛者との自己知識における違いはほぼ見出されていないといえる。

(2)「自己評価」に関する研究[1)]

次に，自己愛的な「自己評価」については，Rhodewalt らの一連の研究において，NPI と様々な自尊心測度との間にほぼ一貫して正の相関が示されている（Morf & Rhodewalt，1993；Rhodewalt & Morf, 1995, 1998）。しかし, Raskin, Novacek, & Hogan（1991）が，自己愛測度，真の自尊心測度，防衛的自己高揚測度との関連を検討した研究において，“ほとんどの臨床家の説明によると，誇大性は，2 つの相反する信念システム，すなわち，強化されたバージョンの自己（理想自己）と現実的な体験に一致する自己（現実自己）を含んでいる。さらに，誇大的な人が失敗から脅威を受けると，目立たないように，自分の強化された自己に一致する態度をとる傾向がある”（p.33）と指摘するなど，自己愛者の肯定的な自己評価は，真の高い自己価値感を反映するのか，防衛的な自己評価であるのかには疑問が残る（Rhodewalt，2001）。また，それに加えて，自己愛者が自己に関するフィードバックに過敏に反応するという議論が盛んになされていたことから，Rhodewalt らは，自己愛者の自己評価は一般的には肯定的であるものの，非常に不安定であるという仮説を立て，それを検証する実験研究（Rhodewalt & Morf，1998）と調査研究（Rhodewalt et al.，1998）を行った。Rhodewalt & Morf（1998）において，参加者は，1 回目と 2 回目でそれぞれ成功フィードバック，失敗フィードバックのどちらかを受けることになる知能テストの課題を 2 度行い，各課題後に自尊心尺度に答えた。その結果，高自己愛者は低自己愛者よりも，1 回目と 2 回目の自尊心得点の変化においてより大きな変動を示した。Rhodewalt et al.（1998）は，調査対象者に連続した 5 日間（研究 1）と 6 日間（研究 2）に自尊心尺度への回答を求め，それにより得られた 5 － 6 日間の自尊心尺度得点の個人内標準偏差と NPI との関連を検討した。その結果，これらに正の相関関係を見出し，自己愛が自尊心の変動性に関連することを実証した。日本においても小塩（2001）がほぼ同様の手続きにより，NPI と自尊心の変動性との関連を検討した結果，NPI の下位尺度の中で「注目・賞賛欲求」が自己像の不安定性を媒介して自尊心の変動性に正の影響を与えることを見出している。以上の結果から, 自己愛者の自己評価は非常に肯定的ではあるものの，脆く不安定であることが示唆されているといえる。この結果は，上述した自己愛的な「自己知識」における自己評価の確信度との結果と矛盾するように思われる。すなわち，一方では自己愛者は自己の評価を確信的に答えるという結果であるのに対し，他方では自己愛者の自己評価は脆く変動しやすいという結果になっている。しかし，自己評価の不安定性については，臨床理論（例えば，Kernberg，1975）や DSM- Ⅳ -TR（APA，2002）の自己愛性人格障害の記述からも指摘されていることを考えると，後者の方がより自己愛者を正確に反映した結果であり，自己愛的な自己確信度は防衛的反応であると考える方が妥当であるように思われる。

(3)「自己調整」に関する研究

さらに，自己愛的な「自己調整」に関しては，Reich（1960）の，自己愛とは本質的に対人的な自己調整であるという観察から発展し，Rhodewalt（2001）は，“自己愛者は，自分が抱く膨張した見方を維持するよう社会的世界を操作する為に，様々な個人内手段や対人的手段を積極的に用いる。”（p.190）と述べている。まず個人内方略としては，自己高揚バイアスが挙げられている（Rhodewalt，2001）。自己愛者の自己高揚バイアスに関する検討として，John & Robins（1994）は，被験者を経営に関するグループディスカッションに参加させ，自分自身を含む 5 人の集団メンバーそれぞれの貢献度を評定させた。その結果，自己愛者は他のメンバーよりも自分の貢献度を有意に過大評価したことから，自己愛と自己高揚バイアスとの関連が示されている。

自己愛的な「自己調整」の対人的方略としては，まず自己強化的な帰属スタイルが挙げられている（Rhodewalt，2001）。そして，それに関して，自己愛者の原因帰属におけるセルフサービングバイアスが, Rhodewalt & Morf（1995, 1998）, Morf & Rhodewalt（1993），Kernis & Sun（1994）, Campbell, Reeder, Sedikides, & Elliot（2000）などにより検証されている。Rhodewalt & Morf（1995）は，調査研究で NPI と Attributional Style Questionnaire との関連を検討した結果，予測どおり自己愛は肯定的イベントを内的－安定的－全般的原因に帰属する傾向と正の関連を示したが，否定的イベントに対しては外的－不安定的－特殊的に帰属する傾向との関連は示されなかった。セルフサービングバイアスとは，成功を自分の内的原因に帰属し，失敗を外的原因に帰属する（Rhodewalt & Morf，1998）ことに関わるバイアスであり，Rhodewalt & Morf（1995）のこの結果からは，自己愛は成功に関するセルフサービングバイアスには関連するが，失敗に関するセルフサービングバイアスには関連しないことが示唆されている。また，Rhodewalt & Morf（1998）においては，実験的研究により自己愛者の原因帰属におけるセルフサービングバイアスが検討されている。その結果，Rhodewalt & Morf（1995）と同様，自己愛者は低自己愛者と比べ，成功フィードバックに対しては自身の能力に大きく帰属する一方，失敗フィードバックを外的原因に帰属する程度においては自己愛者と低自己愛者の有意な差は示されず，実験的研究においても自己愛は失敗に関するセルフサービングバイアスに関連しないという結果になった。しかし，これに反し，自己愛と失敗に関するセルフサービングバイアスとの関連を間接的に支持する結果も存在する。Morf & Rhodewalt（1993）は，自我関連の課題で自分を上回った人と統制ターゲットの両者のパーソナリティを被験者に評価させた。その結果，自己愛者は統制ターゲットよりも成績で自分を上回った人をより否定的に評価した。また Kernis & Sun（1994）は，被験者に，彼らの社会的コンピテンスに対して，肯定的フィードバック，否定的フィードバック

のどちらかを提示した。その結果，自己愛者は低自己愛者に比べ，肯定的フィードバックをより妥当なアセスメント技術とより有能な評価者によるものであると見なし，否定的フィードバックを妥当性に劣る技術と評価者によるものであると見なした。これらの相反する結果に関し，Rhodewalt & Morf（1998）は，“Kernis & Sun（1994）の結果と本結果（Rhodewalt & Morf，1998）を組み合わせて考えると，自己愛者は他者を非難して怒ることにより，失敗を外的原因によるものであるとしていることが示唆される。”（p.19）と述べている。すなわち，この Morf & Rhodewalt（1993）と Kernis & Sun（1994）で得られた結果からは，自己愛者が，直接的に失敗の原因を外的存在に帰属しているわけではないが，外的存在を非難して攻撃することにより，間接的に失敗に関するセルフサービングバイアスを行っていることが示唆されているといえる。

Campbell et al.（2000）は，「自己愛的自己高揚の観点（narcissistic self-enhancement perspective）」と「方略の柔軟性の観点（strategic flexibility perspective）」という二つの観点を用いて，より詳細にセルフサービングバイアスにおける自己愛者と非自己愛者との違いを検討している。Campbell et al.（2000）は，被験者がパートナーと共に行う相互依存的課題と被験者個人で行う独立的な課題の２つの実験を行った。この実験におけるセルフサービングバイアスは，相互依存的な課題で被験者が成功を自分の内的要因に帰属し，失敗をパートナーの責任にする場合（他者との比較による自己高揚方略）と，独立的課題で被験者が成功を自分の内的要因に帰属し，失敗を外的要因に帰属する場合（他者との比較によらない自己高揚方略）が考えられる。さらに，実験での課題で成功か失敗のどちらかのフィードバックを受けた後，被験者はその課題の重要性を評価するよう求められた。この重要性に関しても，被験者が成功した課題を重要と見なし，失敗した課題を重要でないと見なす場合には，他者との比較によらない自己高揚方略が生じたことになる。すなわち，この実験では，相互依存的課題における課題の責任を自己とパートナーの間で分割する「責任の測度」，「独立的課題における帰属の測度」，「課題の重要性の測度」の３種類のセルフサービングバイアスに関する測度が含まれている。そして，実験１では相互依存的課題，実験２では独立的課題が行われた結果，自己愛者は全ての測度において自己高揚を示した一方，非自己愛者は「独立的課題における帰属の測度」と「重要性の測度」では自己高揚を示し，相互依存的課題における「責任の測度」では自己高揚を示さなかった。すなわち，非自己愛者は，他者との比較による自己高揚方略は示さず，他者との比較によらない２つの測度では自己高揚を示した。この結果は，自己愛者は自己高揚の方略に柔軟性が無く，非自己愛者はその方略において柔軟性を有するという「方略の柔軟性の観点」を支持する結果であった（Campbell et al.，2000）。

「自己調整」のさらなる対人的方略として，Rhodewalt & Eddings（2002）は，自己愛者の自伝的記憶の想起における歪みについて検討している。この研究において，被験者たちは，まずデートパートナーになる可能性がある女性からインタビューを受けた後，自尊心や気分を測定する測度と共に，過去の恋愛経験に関するアンケートに答えた。1 週間後，被験者たちは女性から選ばれた（自我高揚的フィードバック）か拒否された（自我脅威的フィードバック）かの報告を受け，その後再び自尊心や気分の測度と過去の恋愛経験に関するアンケートに答えた。その結果，低自己愛者は，自我高揚的フィードバックの場合には，最初のインタビューで報告したものより成功的な恋愛経験を想起し，自我脅威的なフィードバックの場合には，より成功的でない恋愛経験を想起した。また，自尊心はそのフィードバックに一致する変化を示した。一方，自己愛者は，自我高揚的フィードバックの場合には，最初のインタビューより成功的でない恋愛経験を想起し，自我脅威的フィードバックの場合には，より成功的な恋愛経験を想起した。また，自尊心はいずれのフィードバックの場合にも，最初の時点より増加を示す結果になった。この結果からは，自己愛者の自我脅威的フィードバックにおける記憶の肯定的な歪みが，自尊心の防衛的機能に役立っていることが示唆されている（Rhodewalt & Eddings，2002）。

さらに，Rhodewalt（2001）は，“セルフハンディキャッピングは，肯定的だが不確かである自己概念を防衛するのに役立っていると考えられる”（p.13）と述べ，自己愛者の行うセルフハンディキャッピングが自己調整の対人的方略として機能していることを示唆している。そして，Rhodewalt et al.（2006）は，自己愛とセルフハンディキャッピングとの関連について検討した結果，自己愛者は低自己愛者よりも，より日常的にセルフハンディキャッピング行動を行うことが実証されている。

このように，自己愛的な「自己調整」として，まず個人内方略としては自己高揚バイアス，対人的方略としては自己強化的な原因帰属であるセルフサービングバイアス，記憶の想起における歪み，セルフハンディキャッピングなどが挙げられ，それぞれ実証的研究においてそれを支持する結果も得られているといえる。

以上のように，Rhodewalt らが提案した自己愛の社会・認知的自己調整モデルにおいては，それぞれ自己愛的特徴を有すると考えられている「自己知識」「自己評価」「自己調整」の三要素が仮定され，それらが相互に影響し合っているとされている。そして「自己調整」において対人的な方略を取ることから社会的な相互作用が行われ，その結果，それら三要素がさらに影響されるというプロセスが想定されている。加えて，その過程において自己愛者が自己調整を行う為に用いる方略は，自己愛者の自己評価を維持や高揚する為に機能していると考えられる。

３．自己本位性脅威モデル

自尊心と攻撃性との関連について，低い自尊心が攻撃性や凶暴性の原因となるという考え方が伝統的となっているが，それを支持する実証的根拠はほとんど無いことを指摘し，Baumeister ら（Baumeister & Boden，1998；Baumeister et al.，1996）は，自尊心と攻撃性との関係について再検討を行った。そして，伝統的な考え方とは逆に，むしろ高自尊心の一形態である，非常に肯定的で膨張した自己の見方が自我脅威に直面した時に，攻撃性や凶暴性が導かれると主張し，その考え方をより詳細に表した自己本位性脅威モデル（Figure 2）を提唱した。

(1) 高自己評価と自我脅威が導く攻撃性

まず，Baumeister ら（Baumeister & Boden，1998；Baumeister et al.，1996）は，高自尊心を有する全ての人の攻撃性が高いわけではなく，高自尊心の中でも非現実的に膨張した自己評価や不確かで不安定な自己評価が，自我脅威的な状況に出くわした際に，攻撃

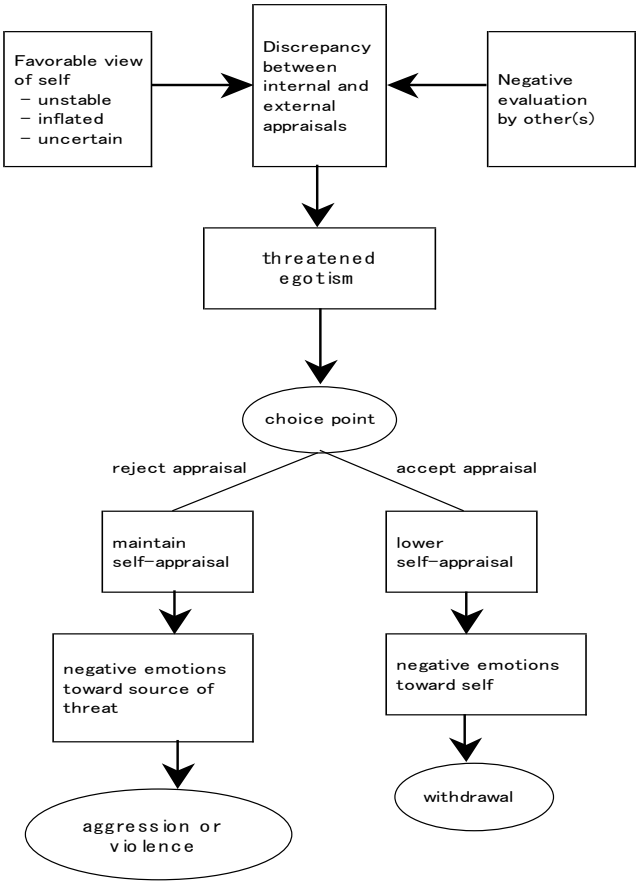

Figure 2. 自己本位性脅威モデル（Baumeister et al., 1996）

性を導くということを論じている。

そして，Bushman & Baumeister（1998）は，膨張した自己評価の測度として自己愛を用い，攻撃性との関連を実験研究において検討している。この実験において，被験者たちは，中絶合法化を支持するか反対するかのどちらか好きな立場でエッセイを書き，他の参加者からそのエッセイを評価された。そしてその後，被験者はその参加者と反応時間課題で競い，被験者が勝った時には，相手に与える騒音の時間と強度を決定した。すなわちこの実験においては，被験者が書いたエッセイに対する他者からの否定的評価が，被験者にとっての自我脅威を表し，後の反応時間課題で被験者が勝利した場合に決定できる騒音時間と騒音強度が，被験者の攻撃性を表している。この実験の結果，自我脅威の攻撃性への有意な主効果が示されたことから，否定的評価（自我脅威）はあらゆる人の攻撃性を導くことが示された。そして，さらに自己愛と自我脅威との有意な交互作用も見出され，否定的評価を受けた人の中でも高自己愛を有する群が最大の攻撃性を表出することが示された。この自己愛と自我脅威の組合せが最大の攻撃性を導くという結果は，この研究における研究１と研究２を通して示されており，安定した結果であるといえる。一方，研究１においては，自己愛者は肯定的評価をしてくれた人に対しても，わずかではあるが低自己愛者よりも攻撃的になることが示されたが，研究２ではこの結果は見出されなかった。すなわち，これらの結果からは，自己愛者による攻撃性は自我脅威に対する特有の反応であり，自己愛者があらゆる人やあらゆる状況に対して無差別に攻撃性を向けるわけではないことが示唆されている（Bushman & Baumeister, 1998）。また，この研究において，自尊心が攻撃性に対する有意な主効果も交互作用も示さなかったことから，あらゆる高い自己評価が攻撃性を導くわけではないことが示唆されている。

(2) 不安定な自己評価と自我脅威が導く攻撃性

不安定な自己評価と自我脅威との関係について，Baumeister & Boden（1998）は，自己の肯定的特性について不確かである人は，他者に自己の肯定的なアイデンティティ要求を支持させることに強く動機付けられ，それゆえ他者からのフィードバックに非常に過敏になるという Wicklund & Gollwitzer（1982）の実験結果を根拠に，“自尊心が不安定な人は，頻繁に，また広く外的評価に対して過敏になる可能性がある。というのも，このような評価は彼らの自尊心を低下させるよう作用し，それは彼らにとっては非常に嫌悪的なことだからである”（p.10）と述べている。すなわち，不安定で不確かな自己評価を有する人は，自己の肯定的評価を確証する為に外的評価に過敏にならざるをえず，それゆえその外的評価は強い自我脅威となる可能性があるといえる。そして，不安定な自己評価が攻撃性と関連するという考え方の根拠として，Baumeister ら（Baumeister & Boden, 1998；Baumeister et al., 1996） は，Kernis, Grannemann, & Barclay（1989）の研究結果を挙げている。Kernis et al.（1989）は，自尊心，自尊心の安定性，怒り・敵意との関連を検討した結果，高自尊心者の中でもその自尊心が不安定な場合には怒りや敵意が高くなるが，安定している場合にはむしろ怒りや敵意は低いという結果を報告した。また，Rhodewalt et al.（1998）が，自己愛と自尊心の変動性との正の関連を見出したことから，膨張した自己評価だけではなく，不安定な自己評価も自己愛と関連することが示されている。

(3) 否定的情動の役割

以上のことから，過度に膨張しているものの不安定である自己評価を抱く人は，頻繁に自己評価と外的評価との不一致を認識させられる状況（自我脅威的状況）に出くわし，その自我脅威的状況が攻撃性を導くという予測が立てられる。しかし，Baumeister ら（Baumeister & Boden, 1998；Baumeister et al., 1996） は，単にその不一致の知覚が攻撃性を導くのではなく，攻撃性に至るまでに否定的情動が重要な役割を果たすという可能性について論じている。この否定的情動についての Baumeister らの考え方は，欲求不満感が強調されていた攻撃性の初期の理論から，否定的情動が攻撃性を導きうるという仮説への転換を提案した Berkowitz（1989）の考え方に拠るものである（Baumeister & Boden, 1998）。Baumeister ら（Baumeister & Boden, 1998；Baumeister et al., 1996）の論じる否定的情動と攻撃性との関係についての考え方は以下の通りである。まず自己評価と外的評価との不一致を認識させられた個人は，２つの選択肢に行き当たる。その選択肢とは，①その否定的な外的評価を受け入れ，自己評価を下方修正するか，②その外的評価を拒絶し，肯定的な自己評価を維持するかである。①が選択された場合には，抑うつ感や悲哀感などの否定的情動が生じ，攻撃性は導かれないが，②が選択された場合には，その外的評価は不当なものと見なされ，評価源に対する怒りやそれに類する否定的情動が生じ，その結果攻撃性が導かれる可能性が高くなる（Baumeister & Boden, 1998；Baumeister et al., 1996）。そして，通常人は自己評価を下方修正することを好まない為，②の選択の方

がより一般的な反応である（Baumeister & Boden，1998）と考えられている。

以上，非現実的に膨張し，しかも不安定で不確かである自己評価と，否定的な外的評価との不一致が認識させられた際，それに対処する為の２つの選択肢が生じ，その外的評価の拒絶という選択をする場合には，否定的情動として怒りやそれに類する情動が生じ，結果攻撃性が導かれる，という Baumeister らが提唱した自己本位性脅威モデルと，それに関連する実証的研究とを概観した。Baumeister & Boden（1998）は，自我脅威に伴う攻撃性の対人的目的として，情報伝達機能と自尊心の回復の２つを挙げている。前者に関しては，攻撃性は反論の一形態として機能し，相手に攻撃性を向けることで，今後その相手の自分に対する軽蔑的考えの表現を防ぐことが出来る可能性が生じ，後者に関しては，攻撃性を向けた相手よりも，自分の方が優れていると感じることで，自尊心を回復させることが出来る（Baumeister & Boden，1998）。すなわち，この後者の観点からは，自我脅威における攻撃性の表出は，自尊心維持の為の対人的方略として機能しているといえる。その意味では，この Baumeister らのモデルは，Rhodewalt らのモデルにおける自己愛的な「自己調整」の対人的方略の中の一形態といえるのかもしれない。また，Baumeister らのモデルは，元々は自己評価と攻撃性との関連から構築されたものであり，直接的に自己愛概念がモデルの構成要素として組み込まれているわけではない。しかし，自我脅威と組み合わさって攻撃性を導く，膨張した自己評価と不安定な自己評価は，共に自己愛と関連が深い概念であることを Baumeister ら（Baumeister & Boden，1998；Baumeister et al.，1996；Bushman & Baumeister, 1998）自身が述べている。すなわち，Rhodewalt らのモデルと Baumeister らのモデルは，共に自己愛的な自己評価のプロセスを表すモデルであるといえる。

(4) 日本における研究

日本においても，自己愛と攻撃性との関連についての研究の中で，この自己本位性脅威モデルが枠組みとして用いられつつある。湯川（2003）は，自己愛傾向が対人的孤立感，対人的孤立感が虚構（メディア）への没入，虚構への没入が攻撃性にそれぞれ正の影響を及ぼすという一連の因果モデルを仮定し，それらの関係を検討した。その結果，自己愛傾向と対人的孤立感が攻撃性に結びつくこと，自己愛傾向と対人的孤立感がメディアへの熱中度に結びつくこと，メディアへの熱中度が攻撃性に結びつくことを見出した。日比野・湯川・小玉・吉田（2005）は，中学生を対象に，自己愛や言語表現力という個人内要因と規範意識などの怒り表出行動の抑制要因に関する検討を行った。その結果，自己愛が怒り・抑うつの感情と，肥大化・終息化の認知を促進し，それらを通して怒り表出行動を促進することを明らかにした。この湯川（2003）と日々野ら（2005）では，自己愛と攻撃性との関連について Baumeister らの自己本位性脅威モデルを参考にしているものの，自我脅威という変数については考慮されていないといえるが，それについて考慮に入れた研究もなされている。福島・岩崎・青木・菊池（2006）は，親の子への攻撃についての研究で，自己の能力発揮の機会損失を子に帰属する場合，その子が自我脅威になるとし，自己愛の高い親が能力発揮の機会損失を子に強く帰属する場合に子への攻撃頻度が高くなると予想した。そして，自己愛，子への帰属，社会的望ましさ，親の性別を第１ステップ，自己愛×子への帰属，自己愛×親の性別，子への帰属×親の性別の交互作用項を第２ステップ，自己愛×子への帰属×親の性別の交互作用項を第３ステップで投入し，子への攻撃を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。その結果，自己愛×子への帰属が値は低いものの有意（$\beta = .108$，$p < .05$）となり，能力発揮の機会損失を子に帰属することが自己愛と子への攻撃との調節変数として働くという予測が支持された。Baumeister らのモデルにおいては，自己評価と外的評価との不一致を認識させられる状況を自我脅威状況としているが，この福島ら（2006）の研究結果からは，自己愛者にとっての自我脅威はそれ以外の状況においても生じうることを示唆しているといえる。

４．両モデルの問題点

以上のように，これら２つのモデルは，自己評価の維持や高揚に関する方略が生じるプロセスについて論じられており，自己評価プロセスの行われ方について理解するには有用なモデルであると考えられる。しかし，これらのモデルには，いくつかの問題点が考えられる。まず一つ目に，両モデルとも，自己調整的方略をとることで自己評価を維持・高揚せざるをえない自己愛的な本質の部分の考慮が欠けているように思われる。すなわち，自己愛的な機能の側面が重視され，その機能を生み出す自己愛人格の本質的な側面はあまり重視されていないと思われる。自己愛的な自己調整方略が生起する際の誘因として，Baumeister らのモデルにおいては，自我脅威を誘発しうる膨張した自己評価と不確かで不安定な自己評価が考えられており，Rhodewalt らのモデルにおいては，「自己調整」に影響を与える自己愛的な「自己評価」として，肯定的ではあるが不安定な自己評価が挙げられている。すなわち，これら両モデルでは，共に自己愛的な自己評価プロセスを生み出す要因として，非常に高いが不安定である自己評価を想定しているといえる。しかし，このような自己評価の有り様は，自己愛人格から派生した一つの姿であり，自己愛人格におけるどのような側面がこのような特徴を生み出しているのかについては考慮されていない。これに関し，Baumeister らのモデルからは，高いが不安定な自己評価を有する自己愛者の，自我脅威に対する過敏な反応が示唆されるが，自我脅威に過剰反応せざるをえない何らかの自己愛的な脆弱性が，その根本には存在しているのではないかと推測される。また，小塩（2001）は，NPI の下位尺度の中で「注目・賞賛欲求」が自己像の不安定性を介して自尊心の変動性に正の影響を与えることを見出しているが，このことからは自己愛（特に「注目・賞賛欲求」）が自己概念の脆さに関わるものであることが示唆されているといえる。

自己愛の脆弱性に関し，示唆を与えてくれると思われる実験研究が近年なされつつある。森尾・山口（2007）は，望ましい性質のはずの高自尊心が必ずしも適応的な情動や行動，認知に結びつかないことを自尊心のパラドックスと称し，その一例として自己愛傾向を取り上げ，実験研究により検討している。この研究においては，自己評価が外部からの情報なしに，内発的に揺れ動く時の程度を「自己概念の力動性」と定義し，高自尊心が自己愛傾向へと結びつくのは，自己概念の力動性が調節変数として働く場合であるとの仮説が立てられている。そして，マウスパラダイムの手法（Vallacher，Nowak，& Kaufman，1994）を用いて被験者の自己概念の力動性

が測定され，実験後に回答された自己愛と自尊心との３変数の関係についての検討が行われた。分析において，NPI の各下位尺度得点を基準変数，自尊心，自己概念の力動性，両変数の交互作用項を予測変数とした重回帰分析が行われた結果，NPI の「優越感･有能感」「注目・賞賛欲求」因子を基準変数とした場合に，交互作用項が有意となり，自尊心がこれら２因子に影響を与える際，自己概念の力動性が調節変数として作用することが示された。すなわち，高自尊心が自己愛のこれら２側面に結びつくのは自己概念の力動性が高い場合であり，それが低い場合には，高自尊心は自己愛と関連しないことが結果から示唆されている。また，Jordan，Spencer，Zanna，Hoshino-Browne，& Correll（2003）は，高自尊心の中には，潜在的自尊心が高く安定した自尊心と，潜在的自尊心が低く防衛的な自尊心が存在し，防衛的自尊心は自己愛と関連するということを主張した。そして，潜在連合テスト（Implicit Association Test，IAT）による自己概念と快概念の連合の強さを潜在的自尊心の指標として測定し，潜在的自尊心，自尊心，自己愛の３変数の関係を検討した結果，自尊心と潜在的自尊心との交互作用が自己愛を予測することが示された。すなわち，潜在的自尊心が低い場合（防衛的自尊心が高い場合）に，高自尊心が高自己愛に結びつくことが示唆されたといえる。これら２つの研究からは，自己愛者の自己概念は不安定なものであり，また自己愛者の高自尊心は防衛的性質を有するものであることが示されている。このことから，内的には自己概念が脆く，防衛的な高自己評価で自己を守らざるをえない自己愛者の有り様がうかがえ，そうせざるをえない状態を導く自己愛者の自己概念の脆弱性がその奥底には潜んでいるのではないかということが推測される。すなわち，自己愛者は自己概念が脆弱であり，それを防衛する為に防衛的自尊心を持つが，自我脅威的状況においてその防衛が脅かされる為に，様々な自己評価プロセスにおける方略を用いて，防衛的な高自尊心を維持しようとするという一連の自己愛的プロセスが存在するのではないかと推測される。

ところで，Rhodewalt らのモデルでは，「自己知識」として自己愛的な自己概念が取り上げられているが，その実証的研究においては自己愛者と低自己愛者との差異は示されず，自己愛者に特有の自己概念についてはほぼ見出されていないといえる。しかし，自己愛者の自己概念の脆弱性が防衛的自尊心により防衛されているのであれば，人間の意識的側面を測定する質問紙法による研究では，自己愛者と非自己愛者に意識的な自己概念の違いが見出されないのは必然であるともいえ，防衛された無意識下の自己概念を測定するには，森尾・山口（2007）のような実験的な研究がより適していると考えられる。また，質問紙研究においては，意識的な自己評価は測定できるものの，それが正確な自己評価であるのか，もしくは脆弱な自己概念を防衛する為の自己評価であるのかは容易に弁別できないと思われる。しかし，自己愛者の優越感は，自己充足的ではなく，他者からの賞賛に依存しているという Kernberg（1982）の指摘や，自己愛者が自己評価を維持する為には承認・賞賛してくれる他者や理想化できる他者に依存せざるをえないという Kohut（1971）の指摘から，自己愛者の自己評価は他者からの評価に依存的な性質を持っており，その点で自己充足的な自己評価とは異なるものであると推測される。よって，自己愛的な誇大感から，この自己充足的な自己評価を統制することで，自己愛者の他者依存的で防衛的な高い自己評価を質問紙研究において測定できるかもしれない。しかし，これは実証的根拠に基づくものではなく，推測の域を出るものではない為，今後慎重に検討していく必要があるだろう。

なお，中山（2008）においても両モデルの問題点が挙げられ，それらの問題点を改善する形で，「自己愛的自己調整プロセスを捉えるモデル」が新たに提案されている。しかし，このモデルにおいても自己愛の機能的側面が重視され，自己愛者の防衛的な高自己評価や根本的な脆弱性の可能性については考慮されていないといえる。

二つ目の問題点として，両モデルで提示される様々な自己評価プロセスにおける方略が，自我脅威状況において生起するものであるのか，もしくは自我脅威に関係なく生じているものであるのかが曖昧であることが挙げられる。Baumeister らのモデルにおいては，自我脅威が想定されているが，Rhodewalt らのモデルではそれについて考慮されていない。しかし，Rhodewalt らの挙げる自己愛的な「自己調整」の個人内方略と対人的方略の中には，Baumeister らのいう自我脅威の状況において生起する方略もあると思われる。例えば，Rhodewalt & Eddings（2002）では，自我脅威的フィードバックが与えられた時に，自己愛者の自尊心を維持するような肯定的な記憶の歪みが見出されている。また，上述したように，Morf & Rhodewalt（1993）と Kernis & Sun（1994）の結果は，外的存在への攻撃により，自己愛者が間接的に失敗に関するセルフサービングバイアスを行うことを示唆しているといえるが，これらの研究で提示された失敗のフィードバックは，被験者にとっての自我脅威を表すと考えられる。すなわち，記憶の想起における歪みや失敗に関するセルフサービングバイアスは，自我脅威的な状況において自己評価を維持する為に生じるものであると思われる。一方，John & Robins（1994）の検討した自己高揚バイアスや，Rhodewalt & Morf（1995，1998）により検討された成功に関するセルフサービングバイアス，Rhodewalt et al.（2006）が検討したセルフハンディキャッピングなどは，自我脅威とは関係なく生起しているものであるといえる。つまり，両モデルを合わせて考えると，自己愛者は日常から自我脅威に関係なく行う方略と，自我脅威状況において用いる方略の両方により，防衛的な自己評価を維持しようとしているのではないかと推測される。自己愛者の自己評価プロセスについてより詳細に理解する為には，これらの区別についても着目する必要があると思われる。

三つ目の問題点は，両モデルで挙げられている方略以外にも，自己愛者の自己評価プロセスにおける方略があると考えられる点である。例えば，Kernberg（1970，1982）の理論においては，病的誇大自己を有する自己愛者の特徴として，他者の過小評価が挙げられている。この過小評価は，外的対象や対象表象は悪い自己表象と悪い対象表象が投影され，それらが脱価値化されることから生じるものである（Kernberg，1970）。また，自己愛者は自分が羨望を感じないですむよう，他者から受け取るものを何であれ脱価値化する（Kernberg，1970）。すなわち，これらのことから，自己愛者が他者を過小評価し，卑下することで，結果的に自己愛者の防衛的な誇大感や優越感はより強固なものにされていると考えられる。また，Kernberg（1982）では，他者を過小評価することは，対象表象からなる内的世界を空虚にすることであり，それにより自己愛者の正常な自己評価は欠如し，さらにそのことが他者に対する共感の欠如

を決定付けるとされている。そして，その共感の欠如に由来して，自己愛者は自分が欲しいものを有する他者との搾取的で寄生的な関係を持つとされており，このような対人関係も自己愛者の防衛的な高自己評価の維持や高揚に寄与するものであると推測される。自己愛に関する先行研究において，このような共感性の欠如に焦点を当てて自己愛概念を捉えようとした研究はほとんど無いといえる。しかし，共感性の欠如は，多くの臨床理論からも指摘される自己愛者の特徴であり，加えてDSM-Ⅳ-TRにおいても自己愛性人格障害の三つの基本的特徴のうちの一つとされており，自己愛概念を捉える上で重要な側面であると考えられる。原田（2007）は，この共感性の欠如を含む自己愛人格尺度を作成しているが，この研究においては自己愛の「誇大性」因子よりも共感性の欠如を表す「自己関心・共感の欠如」因子の方が，臨床理論から指摘される自己愛者の特徴により合致する結果が得られており，共感性の欠如が自己愛概念を理解するのにより有効であることが示唆されているといえる。従って，自己愛的な自己評価プロセスを捉えていく上でも，共感性の欠如に着目して検討していくことは，意義あることであると思われる。

四つ目の問題点として，これら両モデルが，自己愛の過敏性について全く考慮していないということが挙げられる。これらの両モデルがそれぞれ根拠としている多くの研究では，自己愛の測度としてNPIが用いられているが，NPIでは自己愛の過敏性を測定できていないことが指摘されている（谷，2004a）。過敏性に関しては，谷（2005，2006b）が，谷（2004a）の作成した自己愛人格尺度（Narcissistic Personality Scale，NPS）のうち「自己愛的憤怒」と「自己愛性抑うつ」の2因子が過敏性を表す概念であることを示している。谷（2004a）によると，自己愛的憤怒とは，自分が少しでも否定されたり，自分の思い通りにならなかったときにわき起こる怒りの感情を表し，自己愛性抑うつとは，自分の期待通りにいかない場合や，些細な失敗をきっかけにして，落ち込んだり，自信をなくしたりすることを表す。この両概念は，自己愛者が自我脅威に直面すると，それに対処する為の2つの選択肢が生じ，その結果一方では抑うつ感，他方では怒りが生じるというBaumeisterらのモデルにおけるプロセスに，極めて類似しているように思われる。また，中山・中谷（2006）は，自己愛を自己評価の維持機能として捉え，誇大性，評価過敏性という2種類の様式を含む評価過敏性―誇大性自己愛尺度を作成している。この尺度で測定される誇大性とは，「他者によらず，自らを肯定的に認識することで，自己価値・自己評価を肯定的に維持しようとするはたらき」であり，評価過敏性とは，「他者によって自己価値・自己評価を低められるような証拠がないことを確認することによって自己価値，自己評価を肯定的なものとして維持しようとするはたらき」（中山，中谷，2006）を反映しているとされる。この中山・中谷（2006）の誇大性については，NPI-S（小塩，1999）などの既存の尺度から項目が収集されており，実質的にRhodewaltらのモデルやBaumeisterらのモデルで想定されている自己愛概念と大差のないものであると思われるが，評価過敏性については両モデルにおいて考慮されていない概念である。このように，日本においては両モデルで考慮されていない過敏性の複数の側面が見出されており，今後より包括的な自己愛的自己評価プロセスについて考えていく上で，これらをも考慮することは意義のあることだと思われる。

5．今後の課題

本稿においては，近年，特に海外において自己愛研究の主流となりつつある，自己愛的な自己評価プロセスについてのRhodewaltらのモデルとBaumeisterらのモデルと，それらに関連する実証的研究について概観し，その上でこれらのモデルの問題点についても考察した。

今後の課題としては，最後に考察された問題点を考慮し，さらに厳密なモデルを再構成することが挙げられる。しかし，その際，海外の研究知見をそのまま用いるのではなく，日本という文化的要因を考慮した上で，モデルの再構成をする必要があるのではないかと思われる。谷（1997）は，自己愛の消化と排出について論じる中で，日本においては，相互協調的自己観を前提とするため，自己愛に発する自己中心的な意向や情動の表出は困難を伴うとしている。そして，それを「言わなくてもわかって欲しい」という「甘え」が他者に受け入れられることや，たとえ自己愛を表出したとしても，それを他者に受け入れて欲しいという形の「甘え」も存在し，いずれの場合も「甘え」が受け入れられないときには，自分自身の自己愛が未消化のままにとどまり，「恥」が発生すると論じている（谷，1997）。すなわち日本においては，相互独立的自己観を前提とする文化圏とは異なり，その自己愛の処理において独自の困難を有している可能性があるといえる。そこで，日本人における自己愛的な自己評価プロセスについてのモデルを構成する際には，まず谷（1997）が述べるような自己愛のあり方を考慮する必要があると思われる。その上で，自己愛的な自己評価プロセスを生起させる要因として，自己愛人格の根本に存在すると考えられる自己概念の脆弱性をモデルに組み入れる必要があると思われる。しかし，これは自己愛者の防衛的自尊心によって無意識下のものとされている可能性がある為，質問紙研究において測定するのは困難であると考えられる。また，防衛的自尊心についても，質問紙により測定された自己評価が適応的な自尊心であるのか，防衛的な自己評価であるのかを弁別することは困難であると思われるが，今後これらの測定方法についても十分に考えていく必要があるだろう。加えて，自己評価プロセスにおける様々な方略の中で自我脅威状況において生起するものと，それに関係なく日常から行われているものとを区別する必要がある点，既存の研究から提示された以外の方略についても見出していく点，自己愛の過敏的側面についての研究から得られた知見をも統合していく点などの問題点を考慮していくことで，今後さらに包括的なモデルを構築していくことが可能であると思われる。

注：

1）ここでいう「自己評価」は，高さや不安定性など自己愛者が元々有している特徴としての自己評価であるといえるが，表題における「自己評価」は，自己調整において様々な方略を用いられた結果の自己評価を表しているといえ，その点で意味が異なっている。

引用文献

相澤直樹（2002）．自己愛人格における誇大特性と過敏特性　教育心理学研究，**50**，215-224.

American Psychiatric Association (2002). *Diagnostic and*

statistical manual of mental disorders forth edition text revised：*DSM-IV-TR*. Washington, D. C. ：Author.

Bach, S. (1977). On the narcissistic state of consciousness. *Internal Journal of Psycho-Analysis*, **58**, 229-233.

Baumeister, R. F., & Boden,J. M. (1998). Aggression and the self：High self-esteem, low self-control,and ego threat. In R. Geen & E. Donnerstein (Eds.), *Human aggression*：*Theories, research, and implications for social policy*. San Diego：Academic Press. pp.111-137.

Baumeister, R. F., Bushman, B. J., & Campbell, W. K. (2000). Self-esteem, Narcissism, and aggression：Does violence result from low self-esteem or from threatened egotism? *Current Directions in Psychological Science*, **9**, 26-29.

Baumeister, R. F., Heatherton, T. F., & Tice, D. M. (1993). When ego threat lead to self-regulation failure：Negative consequences of high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 141-156.

Baumeister, R. F., Smart, L. & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression：the dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, 5-33.

Berkowitz,L. (1989). Frustration-aggression hypothesis：Examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, **106**, 59-73.

Broucek, F. (1991). *Shame and the Self*. New York：The Guilford Press.

Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism,narcissism,self-esteem,and direct and displaced aggression：Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 219-229.

Campbell,W. K., Reeder, G. D., Sedikides, C., & Elliot, A. (2000). Narcissism and comparative self-enhancement strategies. *Journal of Research in Personality*, **34**, 320-347.

Freud,S. (1914). *Zur Einfuhrung des NarziBnus*, GW, Bd. X, S. 138-170. (懸田克躬・吉村博次訳 (1969). ナルシシズム入門　フロイト著作集 5　人文書院 pp.109-133.)

福島　治・岩崎浩三・青木慎一郎・菊池潤考 (2006). 親の自己愛と子への攻撃：自己の不遇を子に帰すとき　社会心理学研究 ,**22**,1-11.

Gabbard,G. (1994). *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice. The DSM-IV edition*. New York：American Psychiatric Press. (舘哲朗監訳 (1998). 精神力動的精神医学　その臨床実践［DSM－Ⅳ版］③臨床編：Ⅱ軸障害　岩崎学術出版社)

原田　新 (2007). 新たな自己愛人格尺度の作成　日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集 , 137.

日々野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄 (2005). 中学生における怒り表出行動とその抑制要因―自己愛と規範の観点から―心理学研究 , **76**, 417-425.

John, O. P., & Robins,R. W. (1994). Accuracy and bias in self-perception：individual differences in self-enhancement and the role of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 206-219.

Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll,J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*,**85**,969-978.

上地雄一郎・宮下一博 (2002). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成の試み　甲南女子大学研究紀要人間科学編 , **38**, 1-10.

上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成　パーソナリティ研究 , **14**, 80-91.

Kernberg,O. F. (1970). Factors in the Psychoanalytic Treatment of Narcissistic Personalities. *Journal of American Psychoanalytic Association*, **18**, 51-85.

Kernberg, O. F. (1975). *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*. New York：Jason Aronson.

Kernberg,O. F. (1982). Narcissism. In Sander L. Gilman(Eds), *Introducing Psychoanalytic Theory*. New York：Brunner/Mazel　pp.126-136. (小此木啓吾訳 (1984). 自己愛　岩波講座精神の科学 別巻　岩波書店　pp.279-296.)

Kernberg, O. F. (1984). *Severe Personality Disorders*：*Psychotherapeutic Strategies*. Yale University Press. (西園昌久監訳 (1996). 重症パーソナリティ障害　岩崎学術出版社)

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 1013-1022.

Kernis, M. H., & Sun, C. (1994). Narcissism and reactions to interpersonal feedback. *Journal of Research in Personality*, **28**, 4-13.

Kohut, H. (1971). *The Analysis of the Self*. New York：International Universities Press. (水野信義訳　笠原　嘉監訳 (1994). 自己の分析　みすず書房)

Kohut, H. (1977). *The Restoration of the Self*. New York：International Universities Press. (本城秀次訳　笠原　嘉監訳 (1995). 自己の修復　みすず書房)

Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity：Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, **3**, 94-120.

Linville, P. W., & Carlston, D. (1994). Social cognition and the self. In P. Devine,D. L. Hamilton, & T. Ostrom (Eds), *Social cognition*：*Its impact on social psychology*. San Diego,CA：Academic Press. pp.143-193.

Morf, C. C., & Rhodewalt,F. (1993). Narcissism and self-evaluation maintenance：Explorations in object relations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 668-676.

森尾博昭・山口　勧 (2007). 自尊心の効果に対する調節変数としての自己概念の力動性―ナルシシズムとの関連から―　実験社会心理学研究 , **46**, 120-132.

中山留美子 (2005). 自己愛における誇大性 , 評価過敏性と同一性の感覚の関連　日本教育心理学会第 47 回総会発表論文集 , 235.

中山留美子 (2007). 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成―自己愛における評価過敏性 , 誇大性

の関連の変化から　パーソナリティ研究 , **15**, 195-204.

中山留美子 (2008). 自己愛的自己調整プロセス ― 一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて ― 教育心理学研究 , **56**, 127-141.

中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討　教育心理学研究 , **54**, 188-198.

岡田　努 (1999). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について　立教大学教職研究 , **9**, 21-31.

岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析　岩崎学術出版社

小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係とのあり方との関連　性格心理学研究 , **8**, 1-11.

小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性 , 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響　性格心理学研究 , **10**, 35-44.

小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み－対人関係と適応 , 友人によるイメージ評定からみた特徴－　教育心理学研究 , **50**, 261-270.

Raskin. R. N., & Hall. C. S. 1979 A Narcissistic Personality Inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.

Raskin. R. N., Novacek, J. & Hogan, R. (1991). Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality*, **59**, 19-38.

Reich, A. (1960). Pathologic forms of self-esteem regulation. *Psychoanalytic Study of the Child*, **18**, 218-238

Rhodewalt, F. (2001). The social mind of the narcissist：Cognitive and motivational aspect of interpersonal self-construction. In Forgas, J. P., Williams, K. D., & Wheeler, L. (Eds), *The social mind：Cognitive and motivational aspect of interpersonal behavior*. Cambridge：Cambridge University Press. pp.177-198.

Rhodewalt, F., & Eddings, S. K. (2002). Narcissus Reflects：memory distortion in response to ego-relevant feedback among high- and low narcissistic men. *Journal of Research in Personality*, **36**, 97-116.

Rhodewalt, F., Madrian, J. C., & Cheney, S. (1998). Narcissism, Self-knowledge, organization, and emotional reactivity：the effect of daily experience on self-esteem and affect. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 75-87.

Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1995). Self and interpersonal correlates of the narcissistic personality：A review and new findings. *Journal of Research in Personality*, **29**, 1-23.

Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1998). On self-aggrandizement and anger：a temporal analysis of narcissism and affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 672-685.

Rhodewalt, F., Tragakis, M. W., & Finnerty, J. (2006). Narcissism and self-handicapping：linking self-aggrandizement to behavior. *Journal of Research in Personality*, **40**, 573-597.

清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連　教育心理学研究 , **50**, 54-64.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2006). 対人恐怖心性―自己愛傾向 2 次元モデル尺度における短縮版作成の試み　パーソナリティ研究 , **15**, 67-70.

Showers,C. (1992a). Evaluatively integrative thinking about characteristics of the self. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **18**, 719-729.

Showers, C. (1992b). Compartmentalization of positive and negative self-knowledge：Keeping bad apples out of the bunch. *Journal of Personality and Social Psychology,* **62**, 1036-1049.

高橋智子 (1998). 青年のナルシシズムに関する研究－ナルシシズムの 2 つの側面を測定する尺度の作成－　日本教育心理学会第 40 回総会発表論文集 , 147.

谷　冬彦 (1997). 現代日本青年における自己愛の消化と排出－対人恐怖的心性をめぐって－　日本青年心理学会大会発表論文集 , **5**, 15-16.

谷　冬彦 (2004a). 新たなる自己愛人格尺度の作成 (1) －因子構造と対人恐怖的心性との弁別性の確認－　日本心理学会第 68 回大会発表論文集 , 69.

谷　冬彦 (2004b). 新たなる自己愛人格尺度の作成 (2) －自我同一性と自尊心との関連から－　日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集 , 52.

谷　冬彦 (2005). 自己愛人格の類型化に関する研究　日本心理学会第 69 回大会発表論文集 , **31**.

谷　冬彦 (2006a). 自己愛人格尺度 (NPS) 短縮版の作成　日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集 , 409.

谷　冬彦 (2006b). 自己愛人格と自己愛的甘えに関する研究　日本心理学会第 70 回大会発表論文集 , **22**.

Tchanz, B. T., & Rhodewalt, F. (2001). Autobiography, reputation, and the self：on the role of evaluative valence and self-consistency of the self-relevant information. *Journal of Experimental Social Psychology,* **37**, 32-48.

Vallacher, R. R., Nowak, A., & Kaufman, J. (1994). Intrinsic dynamics of social judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 20-34.

Westen, D. (1990). The relations among narcissism, egocentrism, self-concept, and self-esteem：Experimental, clinical, and theoretical considerations. *Psychoanalysis and Contemporary Thought*, **13**, 183-239.

Wicklund, R. A., & Gollwitzer, P. M. (1982). *Symbolic self-completion*. Hillsdale, NJ：Erlbaum.

湯川進太郎 (2003). 青年期における自己愛と攻撃性―現実への不適応と虚構への没入をふまえて―　犯罪心理学研究 , **41**, 27-36.